第64編　タリアセン・ウェスト[*1]

フランク・ロイド・ライト[*2]（1867〜1959）は、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエとともに近代建築の三大巨匠とされるアメリカの代表的建築家である。浮き沈みの激しい私生活を送りながら、アメリカ大陸と日本に400に迫る作品を残した。ウィスコンシン大学マディソン校土木科を中途退学した後、シカゴで実務につく。移籍したアドラー&サリヴァン[*3]事務所で才能を見込まれ、同事務所における1888年以降のほとんどの住宅設計を任せられるようになる早熟の建築家であった。ライトはサリヴァンをLieber Meister（親愛なる師）と呼んで尊敬し、影響を受けたことを生涯公言していたが、私生活が原因で一時アメリカを追われることになる。

そんなつらい時代に遠い日本から舞い込んだ仕事が帝国ホテル新館の設計であった。そのために1913年に初来日し、以後もたびたび来日することになる。しかし、大幅な予算オーバーと工期の遅れに起因する経営陣との衝突から、このホテルの完成を見ることなく離日を余儀なくされた。彼の代表的作品は、60歳を超えてからの時期に集中している。ライトのスタイルには時代とともに変遷があり、一時はマヤ文化の装飾を取り入れたことがあるが、基本的にはモダニズムの流れをくみ、幾何学的な装飾と、流れるような空間構成が特徴である。日本文化からも少なからぬ影響を受けていることを自他ともに認め、浮世絵の収集家としても知られている。

晩年の基地「タリアセン・ウェスト」は、タリアセン・フェローシップの冬の家として1937年に設計され、「アリゾナの砂漠の素材を建築にどう生かすか」という命題に対して、さまざまな有機的な試みがなされた、ライトの「プレーリー（草原様式）建築[*4]」を代表する傑作である。設計手法として正方形の入れ子単位をベースとし、それをもとに建物を幾何学的に配置する。このようなユニットを用いた設計手法は、ライトの建築の本質的特徴であり、他の多くの建築でユニットに三角形、長方形、六角形も用いている。

タリアセンでは、若い所員や学生とともに現地の岩を砕いてコンクリートとともに打設するなど、荒々しい手作りの跡が随所に見られる。周辺の自然条件の理解と尊重は徹底され、(1) Nature of the Site、(2) Methods and Materials、(3) Destruction of the Box、(4) Building for Democracy の4つの言葉に象徴される建築思想の根幹は、ここにいかんなく発揮されているのである。

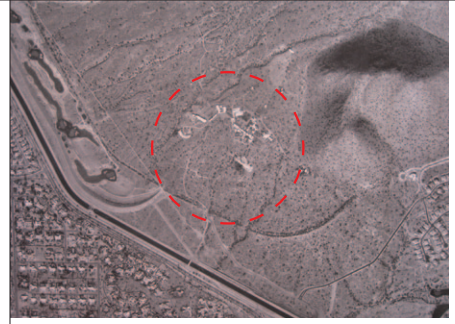

写真64-1 タリアセン・ウェスト鳥瞰

写真64-2 タリアセン・ウェスト外観

写真64-3 タリアセン・ウェスト内観

*1 Taliesin West

*2 Frank Lloyd Wright (1867〜1959)

*3 Dankmar Adler & Lois Sullivan (1856〜1924)

*4 Prairie Style House: ライトが開発したアメリカの住宅様式